

# 話法の語用論的制約

河野 武

## 0. 序 論

発話の引用・報告形式としての話法には、直接話法 (DS)、間接話法 (IS)、及び DS と IS の折衷形式である自由間接話法 (FIS) がある。次の例を参照。

- (1) a. 'I'm exhausted,' she said. (DS)  
b. She said, 'I'm exhausted.'
- (2) She said that she was exhausted. (IS)
- (3) a. She was exhausted, she said. (FIS)  
b. She said, she was exhausted.

過去の標準的な見方 (Leech 1980; Halliday 1985; Quirk et al. 1985 等) に依れば、DS は、元発話者の視点に立った元発話の内容と形式の両面にわたる多かれ少なかれ「忠実な」再現である。他方、IS は、現発話者の視点に立った元発話の内容 (命題内容及び発話内効力) の解釈的表示であり、したがって元発話の「言い回し」は温存されない。但し、DS においても、常に厳密な逐語的再現が約束される訳ではなく、パフォーマンス上の不整合やある種の談話標識などは現発話者の裁量で編集されることがあるし、翻訳や大雑把な物言いにおけるように類似性に基づく解釈的表示がなされる可能性がある (Clark & Gerrig 1990; Wilson 2000)<sup>1</sup>。FIS は、IS と同様に現発話者の視点に立つが、元発話の文形式を残しつつ時制・人称などの最小限の変更を加えた解釈的表示である。本論では、DS と IS を中心にその語用論的制約について考察する。特に、伝達動詞の分類、DS と IS における伝達動詞の使い分け、さらに伝達節 (上の例の she said の部分) に課される制約について検討する。伝達節については、say のような無標の発話動詞を伴う場合には文末・文頭での生態は変わらないが、多くの発話動詞には文中位置による生態の違いが見られるが、この点について検討を加える。

## 1. 先行的観察の概観

DS と IS を特徴づける伝達動詞に関しては、次のような観察がなされている。

- i) 伝達動詞は狭義の「伝達動詞」(communication verbs) (例えば、say, reply, demand, warn, interrupt, sigh 等) と「意識動詞」(consciousness verbs) (例えば、think, believe, wonder, notice, remember 等) から成る (Banfield 1982)。

- ii) 伝達動詞・意識動詞には DS にのみ生起するもの（例えば, query, intone, think aloud 等）と IS にのみ生起するもの（例えば, recommend, reveal, mention 等）がある（Banfield 1982:34-35）。
- a) 修辭的行為を表す意味的に複雑な動詞（semantically complex verbs for rhetorical acts）には, DS には生起しないもの（例えば, insinuate, imply, remind, hypothesize, deny, make out, claim, pretend, maintain 等）と, 逆に IS には生起しないもの（例えば, persuade, forbid, undertake, encourage, recommend 等）とがある（Halliday 1985: 232, 235）。
- b) 内在的に発話動詞でないもの（例えば, muse 等）は IS には生起しない（Halliday 1985:232）。
- c) 「音声記述動詞」(phonetically descriptive verbs)（例えば, mumble, gasp, squeak, stutter 等）は IS におけるよりも DS においてより容認可能である（Leech 1983:213）。
- d) 発語内動詞（例えば, order, urge, implore 等）は DS におけるよりも IS においてより容認可能である（Leech 1983:213）。
- iii) DS においては, 文頭の伝達節には伝達動詞は生起するが, 意識動詞は生起しない（Banfield 1982:45）。
- 上の ii)と iii)の具体例は, それぞれ次の(4)~(9), (10)~(11)に示すようなものである。

- (4) a. Harry queried, 'What's the matter?'  
 b. \*Harry queried what was the matter.
- (5) a. John thought aloud, 'I will begin again.'  
 b. \*John thought aloud that he would begin again.
- (6) a. \*The dealer recommended, 'Try the less expensive one.'  
 b. The dealer recommended that he try the less expensive one.
- (7) a. \*Harry mentioned, 'The painters would come on Friday.'  
 b. Harry mentioned that the painters would come on Friday.
- (8) a. 'That was a mistake,' mumbled Maggie. [more likely]  
 b. Maggie mumbled that that was a mistake. [less likely]
- (9) a. 'Go away,' ordered Maggie. [less likely]  
 b. Maggie ordered me to go away. [more likely]
- (10) a. \*She wondered: 'Lords, Ascot, Hurlingham, what is it?'  
 b. Lords, Ascot, Hurlingham, what is it? she wondered.
- (11) a. \*She noticed: 'He is getting fat.'  
 b. He was getting fat, she noticed.

上の観察には, 様々な欠陥が見られる。まず第一に, 記述が事実と反している場合がある点である。例えば, ii a)や ii d)には次のような反例が存在する。

- (12) —I would go a step further, Mr Bloom insinuated. (Banfield 1982:46)
- (13) 'No post on Sundays,' he reminded them happily as he spread marmalade on his newspapers, 'no damn letters today —' (*Potter*)<sup>2</sup>

- (14) 'Do it again,' Dudley ordered. (*Potter*)

これらの例では、DS には生起しない、もしくは生起しにくいとされる動詞が現れている。

第二に、伝達動詞の意味特性、特に多義性が考慮されていないので、DS・IS における分布が不明確になっている点である。例えば、demand は、「強く命令する」ないしは「強く問いつめる」という意味をもつが、それらの意味は DS と IS で使い分けられている。次の例を参照。

- (15) a. 'You should do this right now,' Kathryn demanded.  
 b. Kathryn demanded that he should do that right then.  
 (16) a. 'Did you do this?' Kathryn demanded.  
 b. \*Kathryn demanded whether he had done that.

「強く命令する」の意では DS・IS のいずれにも用いられるが、「強く問いつめる」の意では DS のみにしか用いられない。(伝達動詞の多義性の使い分けについては、後で詳しく検討する)。

第三に、DS においては、文頭の伝達節は文中・文末の伝達節に較べて制約がきついが、どのような制約が関わっているかが明らかにされておらず、したがって記述が曖昧になっている点である。次の例を比較されたい。

- (17) a. 'She's under sentence of execution,' he whispered.  
 b. He whispered, 'She's under sentence of execution.'

文末の伝達節を伴う (17 a) が排除される状況はまず考えにくい、文頭の伝達節を伴う (17 b) のような DS は文脈次第で不自然さが生ずる可能性がある (この点についても再び議論する)。

第四に、DS・IS における伝達動詞の分布の偏りは、おおむね個別の動詞を列挙するのみで、何に起因するのかがつまびらかでない。伝達動詞と被伝達節との関係についてさらに踏み込んだ検討が必要となる。

## 2. 直接話法・間接話法の伝達動詞

### 2.1 直接話法の伝達動詞

DS に関与する伝達動詞は、元発話を様々な形で報告する役割をもつ。これらの動詞は、ただ単に元発話が出現したことを述べるにとどまらず、発話行為がどのようなになされたか、どのような発語内行為を伴ってなされたか、どのような談話内での位置づけの中でなされたか等をも表出する。これらの動詞は、中核の意味として、'saying' をもつとみなしうる。以下、DS に関わる伝達動詞の分類を提案する。

#### i) <saying X> (unmarked)

まず第一に、DS・IS を問わず、伝達動詞のもっとも基本的なものは say である。Say は多義的であり、発語行為そのものか発語内行為の〈主張〉のいずれかを表す (Lyons 1995:241)。このうち、発語行為を表す say は、引用発話が平叙文・疑問文・命令文・感嘆文のいずれであっても自由に共起しうる。次の例では、疑問文が引用されていることに注意されたい。

- (18) [A]t last the Caterpillar took the hookah out of its mouth, and addressed her in a languid, sleepy voice. ‘Who are you?’ *said* the Caterpillar. (*Alice*)<sup>3</sup>

ii) < saying X in manner Y >

第二に、DS の伝達動詞には、< saying X > の意に加えて、様々な発話行為の様態を伴う類がある。様態は、前置詞句や副詞で顕在化するか、動詞の内在的意味として伝達されるかのいずれかである。

- (19) ‘I’ve had nothing yet,’ Alice *replied in an offended tone*, ‘so I can’t take more.’ (*Alice*)  
(20) ‘I wasn’t asleep,’ he *said in a hoarse, feeble voice*: ‘I heard every word you fellows were saying.’ (*Alice*)  
(21) ‘Ahem!’ *said* the Mouse *with an important air*, ‘are you all ready? ...’ (*Alice*)  
(22) ‘Please would you tell me,’ *said* Alice, *a little timidly*, for she was not quite sure whether it was good manners for her to speak first, ‘why your cat grins like that?’ (*Alice*)  
(23) ‘Oh, I beg your pardon!’ *cried* Alice *hastily*, afraid that she had hurt the poor animal’s feelings. ‘I quite forgot you didn’t like cats.’ (*Alice*)  
(24) ‘Off with her head!’ the Queen *shouted* at the top of her voice. (saying loudly) (*Alice*)  
(25) Alice gave a little scream of laughter. ‘Oh hush!’ the rabbit *whispered* in a frightened tone. (saying very softly using one’s breath) (*Alice*)

これらのうち、(19)～(21)のような ‘in a/an Adj tone/voice’ ないしは ‘with a/an Adj air’ などの形式は多種多様な Adj の選択によってほとんど無尽蔵に作り出される。また、(22)・(23)のような発話態度を表す副詞も同様である。さらに、発話様態を内在化する伝達動詞は、(24)・(25)の他にも croak, hiss, bark, yell, moan, mutter, thunder, growl など豊富にある。(これらの動詞は Leech 1980 の音声記述述語 (phonetically-descriptive predicates) に相当するものである)。

iii) < saying X with illocutionary force Y >

DS を取る第三の動詞類は発語内動詞である。

- (26) ‘Stand back,’ Wood *warned* Harry. He bent down and freed one of the Bludgers. (*Potter*)  
(27) ‘Make it move,’ he whined at his father. Uncle Vernon tapped on the glass, but the snake didn’t budge. ‘Do it again,’ Dudley *ordered*. (*Potter*)  
(28) ‘Say you’re ill,’ said Ron. — ‘Pretend to break your leg,’ Hermione *suggested*. (*Potter*)

この種の発語内動詞は、DS が当該の発語内の力を持つことを要求する (内田 1979; Huddleston & Pullum 2002 を参照)。従って、上の例では、引用発話はそれぞれ <警告>, <命令>, <提案> を表

すものでなければならない。この類には、上記の他に ask, advise, admit, demand, command, confess, plead, urge 等が含まれる<sup>4</sup> (なお、発語内動詞は Leech 1980 の内容記述述語 (content-descriptive predicates) に対応する)。

iv) < **saying X with discourse alignment variable Y** >

DS と共起する第四の動詞は、当該発話の談話ユニット内での位置づけを表示する役割を果たすものである。これらは談話の切り出し、継続、中断、終結を表す。

- (29) ‘Cheshire Puss,’ she *began*, rather timidly, as she did not at all know whether it would like the name: however it only grinned a little wider. (*Alice*)
- (30) ‘Of course,’ the Dodo replied very gravely. ‘What else have you got in your pocket?’ he *went on*, turning to Alice. (saying continuously) (*Alice*)
- (31) ‘Suppose we change the subject,’ the March Hare *interrupted*, yawning. (saying out of turn) (*Alice*)

上記の他に、「付加」を表す add, 「応答」を表す answer/reply, 「反復」を表す repeat 等が加えられうる。

v) < **doing Y concomitantly with saying X** >

DS と関わる第五の動詞類は、上記四種類の動詞と異なり、‘saying’ に直接関与せず、発話行為に随伴しておこる行為を表すものである。発話行為との結びつきが弱いので、一見元発話の「引用」としては不十分に思えるかもしれない。

- (32) ‘What a pity it wouldn’t stay!’ *sighed* the Lory, as soon as it was quite out of sight ... (*Alice*)
- (33) Inside were mounds of gold coins. Columns of silver. Heaps of little bronze Knuts. ‘All yours,’ *smiled* Hagrid. (*Potter*)
- (34) ‘I’m a *what*?’ *gasped* Harry. — ‘A wizard, o’course,’ said Hagrid, sitting back down on the sofa ... (*Potter*)

この種の動詞には、他に cry (「泣く」), sob, shudder 等が含まれる。

vi) < **saying X in the mind** >

DS と共起する第六の動詞は意識動詞 (ないしは Quirk et al. 1985 の事実動詞 (factive verbs) の下位類である私的動詞 (private verbs)) である。この種の動詞は、認知状態や認知行為を表すものである。これらの動詞は、他の伝達動詞と異なり、他者を巻き込まず、話者自身の内的コミュニケーションの体裁をとる。(ちなみに、Banfield 1982 は think を “a verb of ‘self-communication’” と名付けている)。いわば、実際の発話に比肩する内的独白である。

- (35) ‘Well! I’ve often seen a cat without a grin,’ *thought* Alice; ‘but a grin without a cat! It’s the most curious thing I ever saw in my life!’ (*Alice*)

(36) 'What should I do now?' she *wondered*. (OALD)

## 2.2 間接話法の伝達動詞

まず第一に、IS に関与する伝達動詞は、上の iv と v の類を除いて DS と共通する。ただし、これらの動詞のうち、補文を取らないものは IS と共起できない。従って、例えば、ii の類のうち、cry や hiss 等は IS の伝達動詞として不適格となる。

(37) \*He cried that he couldn't swim.

(38) \*She hissed him to leave her alone.

第二に、iv の伝達動詞が IS に用いられる際には、被伝達節を補文とすることができず、別の伝達動詞 (saying/asking 等) を仲介させなければならない。

(39) a. \*He went on what else she had got in her pocket.

b. He went on (speaking) by asking what else she had got in her pocket.

(40) a. \*The March Hare interrupted her to change the subject.

b. The March Hare interrupted her (speaking) by saying that he would change the subject.

上の例を、それぞれ DS の文(30)・(31)と対比してみると、伝達動詞は一見 DS の引用発話を目的節に従えているように見えるが、実はそうではない。(39 b)では、同一人物の先行発話に続けて当該の引用発話がなされたことを表す。また、(40 b)では、当該の引用発話によって他の人物の発話がさえぎられたことを表す。このように、DS では当該の引用発話を構成素とする談話ユニットの存在には言及されないが、IS では言及される。

第三に、v の類は、発話行為に直接関与せず、発話行為に随伴しておこる行為を表すものであったが、これらは IS と共起することを禁止される。

(41) \*The Lory sighed that it was pity that it wouldn't stay.

(42) \*Hagrid smiled that they were all Harry's.

(43) \*Harry gasped that he was a wizard.

これらの動詞は、そもそも補文を取らず、統語的にも IS の伝達動詞として失格であるが、意味的に言っても発話行為を記述しないので IS の伝達動詞として不適格となる。これらの動詞の意味内容を表すためには、said with a sigh/smile/gasp のように純然たる伝達動詞 said と様態の前置詞句に分解する必要がある。

第四に、vi は、DS においては「内的コミュニケーション」といったかなり特殊な(擬似的)発話行為を表し、用いられる動詞も限定されていたが、IS では心的表示を行う動詞として自由に用いられる。

(44) Alice thought that a grin without a cat was the most curious thing she had ever seen in her life.

- (45) She wondered what she should do then.

上の IS の発話においては、対応する DS(35)・(36)とは異なり、心的にであれ何らかの発話がなされたことは想定されていないことに注意しておきたい。IS においては、単に認知状態や認知行為を記述できさえすれば十分なのである。この結果、私的動詞は IS の環境でかなり自由に振る舞い、DS では生起しにくい私的動詞、例えば *doubt*, *guess*, *imply*, *know*, *pretend* 等も IS では許容される。

## 2. 直接話法と間接話法の意味的対立

伝達動詞と DS・IS との共起関係を探る上で重要なのは、伝達動詞の意味的区別である。伝達動詞には多義性を示すものがあり、可能な意義が DS と IS のいずれかに偏在することがある。以下、*demand*, *query*, *doubt*, *suggest* の場合を検証してみたい。

まず、*demand* は次に示すような意義がある。

- (46) *demand*:
- a) to ask for something very firmly
  - b) to ask a question or order something to be done very firmly (*LDOCE*)

ここで、(46 a)は引用とは無関係なので無視するとして、(46 b)の「強い態度で相手への〈質問〉ないしは〈命令〉を行う」の意に注目したい。次の例を観察されたい。

- (47) a. 'Did you do this?' Kathryn demanded.  
 b. \*Kathryn demanded whether he had done that.
- (48) a. 'You should do this right now,' Kathryn demanded.  
 b. Kathryn demanded that he should do that right then.

例から分かるように、〈命令〉行為の引用は DS(48 a), IS(48 b)のいずれも許容されるが、〈質問〉行為の引用は DS(47 a)では許容されるが IS(47 b)では許容されない。

次に、*query* について検討してみたい。まず、語彙的意味を確認しておく。

- (49) *query*:
- a) to express doubt that something is true
  - b) to ask a question (*LDOCE*)

〈疑念の表明〉か〈質問〉かの区別を念頭において次の例を見てみたい。

- (50) a. \*'Are they leaving soon?' queried Mrs Evans.  
 b. Mrs Evans queried whether they were leaving soon.
- (51) a. 'What time are we leaving?' queried Mrs Evans.  
 b. \*Mrs Evans queried what time they were leaving.

例が示すように、〈疑念の表明〉は IS のみと共起し、〈質問〉は DS のみと共起する。  
次に、同様の手順で *doubt* について眺めてみたい。

- (52) *doubt*:
- a) to think that something may not be true
  - b) to think that something is unlikely (*LDOCE*)
- (53) a. \*‘Shall we ever see George again?’ I doubted.  
b. I doubted whether we would ever see George again.
- (54) a. \*‘We will (ever) see George again,’ I doubted.  
b. I doubted that we would ever see George again.

可能な意義である〈疑念の表明〉と〈不可能性の確信〉は、いずれも IS とは適合するが DS とは不適合を示す。

最後に、*suggest* を観察したい。

- (55) *suggest*:
- a) to tell someone your ideas about what they should do
  - b) to make someone think that a particular thing is true (*LDOCE*)
- (56) a. ‘We should write that into the contract,’ she suggested.  
b. She suggested that they should write that into the contract.
- (57) a. \*‘You are lazy,’ she suggested.  
b. She suggested that I was lazy.

*Suggest* は〈提案〉と〈示唆〉の意を持つが、〈提案〉は DS・IS のいずれにも分布するのに対して〈示唆〉は IS のみに偏在する。

### 3. 直接話法における文頭伝達節の機能と特性

DS において、文頭伝達節は文中・文末伝達節とは異なる性質をもつ。談話データの観察から、DS の無標の伝達節は文末伝達節であり、文中伝達節は文末伝達節の文体的変種であるとみなしうる。従って、ここでの議論は文末伝達節と対比的に文頭伝達節を捉えることにしたい。すでに検討したように、DS は実に多種多様な伝達動詞を内包する節によって導かれる。しかし、注意深く観察してみると、文頭伝達節はそもそも文末伝達節よりも使用頻度が低く、用いられる伝達動詞の種類も格段に少なくなっていることが分かる。この事実を説明するために、まず、文頭伝達節には固有の語用論的機能が付与されているものと考えたい。この機能とは、次に示すような引用発話の導入機能である。

- (58) DS における文頭伝達節の機能：  
導入機能：〈What S (=the original speaker) said is this〉

この導入機能は、認知的・論理的に *wh*-分裂文の形式を取り、引用発話を談話内に提示する役割

をもつものである。この導入機能の証左となる表現は自然データの中に見いださう。次の例を参照されたい。

- (59) He meant to say thank you, but the words got lost on the way to his mouth, and *what he said instead was*, ‘Who are you?’ (*Potter*)
- (60) Then a lamp came bobbing over the heads of the students and *Harry heard a familiar voice*: ‘Firs’-years! Firs’-years over here! All right there, Harry?’ (*Potter*)
- (61) Then *Hagrid’s voice rang out, saying*, ‘Back, Fang — back.’ (*Potter*)
- (62) Alice was beginning very angrily, but *the Hatter and the March Hare went* ‘Sh! sh!’ and the Dormouse sulkily remarked, ‘If you can’t be civil, you’d better finish the story for yourself.’ (*Alice*)

(59)の伝達節は(58)の式型の直接的な反映である。(60), (61)の伝達節においては, まず誰かの「声」の出現が告げられ, 続いてその内実が明かされている。また, (62)のような伝達動詞 go を伴う伝達節は典型的に文頭に位置し, もっぱら導入機能を担うものといえる。ここで特に強調しておきたいのは, 導入機能をもつのは文頭の伝達節に限定されるのであり, 文末の伝達節はその機能をもたないことである。試みに, 上の(59), (60), (62)に必要な調整を加えつつ伝達節を文末に後置してみよう。

- (59′) He meant to say thank you, but the words got lost on the way to his mouth. ‘Who are you?’ *he said instead*.
- (60′) Then a lamp came bobbing over the heads of the students. ‘Firs’-years! Firs’-years over here! All right there, Harry?’ *Harry heard a familiar voice*.
- (62′) Alice was beginning very angrily. ‘Sh! sh!’ *the Hatter and the March Hare went*. And the Dormouse sulkily remarked, ‘If you can’t be civil, you’d better finish the story for yourself.’

このように, 導入的な伝達節の提示が後回しにされ, 引用発話の提示が優先された結果, 発話の自然な流れが阻害されていることが実感できる。先行発話との橋渡しを行いつつ, 引用発話を方向付ける役割を担う伝達節を遅らせることで, 引用発話の提示がやや唐突なものになっている<sup>5</sup>。この「唐突さ」は, 関連性理論の観点から言えば, 受信者の「処理コスト」の増大の徴候であるとみなさう (Sperber & Wilson 1980 を参照)。

ここで, 文頭伝達節の導入機能と関連して, 先に挙げた伝達動詞 *v* 類, すなわち *sigh*, *smile*, *gasp* のような, 発話行為そのものは記述せず, 発話行為に随伴する行為を表す動詞を伴う伝達節に注意しておきたい。これらの伝達節は, 先の例(32)~(34)に見るように, 文末にはまったく自然に生ずるが, 文頭では生じ得ない。

- (32′) \*The Lory *sighed*, ‘What a pity it wouldn’t stay!’
- (33′) \*Hagrid *smiled*, ‘All yours.’
- (34′) \*Harry *gasped*, ‘I’m a *what*?’

これらの伝達節が容認されないのは、明らかに伝達動詞の特性によるものである。これらの伝達動詞は、発話行為そのものと関与しないので、内在的に引用発話を導入することができないのである。導入機能に関わらない文末位置で起こりうるのは当然である。

導入機能を持つ伝達節は固有の情動的ステイタスを併せ持つ。情報上の制約を特に受けない文末伝達節とは対照的に、文頭伝達節には新情報は現れ得ない。現れ得る情報は、先行談話から喚起された (evoked) 内容か、推論可能な (inferrable) 内容かのいずれかでなければならない (情報の分類については Prince 1978, 1981 を参照)。以下、具体例をいくつか観察してみたい。

- (63) a. Questions exploded inside Harry's head like fireworks and he couldn't decide which to ask first. After a few minutes he *stammered*, 'What does it mean, they await my owl?' (*Potter*)  
b. 'Professor Quirrell!' said Hagrid. 'Harry, Professor Quirrell will be one of your teachers at Hogwarts.'  
'P-P-Potter,' *stammered* Professor Quirrell, grasping Harry's hand, 'c-can't t-tell you how p-pleased I am to meet you.' (*Potter*)
- (64) a. 'Hush! Hush!' said the Rabbit in a low, hurried tone. He ... put his mouth close to her ear, and *whispered* 'She's under sentence of execution.' (*Alice*)  
b. 'Good Lord,' said the barman, peering at Harry, 'is this — can this be —?' ... 'Bless my soul,' *whispered* the old barman. 'Harry Potter ... what an honor.' (*Potter*)
- (65) a. 'Stupid things!' Alice began in a loud, indignant voice, but she stopped hastily, for the White Rabbit *cried out*, 'Silence in the court!' ... (*Alice*)  
b. The table was a large one, but the three were all crowded together at one corner of it: 'No room! No room!' they *cried out* when they saw Alice coming. (*Alice*)

(63 a)では、先行発話で主人公がどのような質問をしたらよいか考えあぐねていることが述べられており、伝達動詞 *stammered* はそれから推論可能な内容を表しているといえる。一方、(63 b)では、「特別な生徒」である Harry の指導教員になることを知ってしどろもどろになっている様子が語られており、Quirrell の反応は先行発話から特に予測されるものではない。しどろもどろの挨拶はむしろ予想外のものである。(64)についても同様のことがいえる。(64 a)では、既に話者が声を落として発話したこと、更に口を耳元に近づけたことが述べられているので、ささやき声は容易に推論できる。(64 b)では、これとは対照的に、高名な Harry を目のあたりにしておもわず嘆息をもらす場面での *whispered* は唯一的に予想される発話行為とはいえない。(65)の文頭と文末の伝達節にも同様の対比が見られる。法廷の秩序を守る立場にある人物の発話行為としては *cried out* は特に新奇さはないが、部屋に入ってきた人物に対して唐突に不可解な (すなわち、発話意図が自明でない) 発話を *cried out* するのは意表をつく行為である。

次に、文頭伝達節における伝達動詞が先行文脈から喚起された情報を表す場合を観察しておきたい。

- (66) It was the White Rabbit returning ...: he came trotting along in a great hurry, *muttering* to himself as he came, 'Oh! the Duchess, the Duchess! Oh! won't she be savage if I've kept her waiting!' (*Alice*)

- (67) All the time they were playing the Queen never left off quarrelling with the other players, and *shouting* 'Off with his head!' or 'Off with her head!' (*Alice*)

これらの例において、問題の登場人物である the White Rabbit も the Queen も物語の先行部分で既に紹介済みであり、独り言を言ったり、権威を振りかざして大声で命令しまくったりすることがこれらの人物の特徴付けになっている。ここでの伝達動詞 *muttering/shouting* はテキスト内で確立した共有知識に再び言及するものである。

以上、文頭伝達節は認知的・論理的に wh-分裂文の形式を取り、先行発話から喚起された情報か、推論可能な情報を表示することを見た。これと関連して、Prince 1978 は、明示的な wh-分裂文が満たさなければならない条件を次のように規定している。

- (68) Discourse condition on WH-clefts: A WH-cleft will not occur coherently in a discourse if the material inside the (subject) WH-clause does not represent material which the cooperative speaker can assume to be appropriately in the hearer's consciousness at the time of hearing the utterance. (Prince 1978:888)

要するに、wh-節は、聞き手に意識化されているのが適切だと話し手によって判断される情報を表していなければならないことが述べられている。このように規定される情報とは、つまるところ喚起された情報及び推論可能な情報に他ならない（河野 1998 を参照）。再び議論を DS に戻すと、人の日常的な行為の中で発話行為は最もありふれた行為の一つであるので、(58) のような導入機能を踏まえて引用発話を提示することは常に自由である。事実、文頭伝達節において圧倒的に多く用いられるのは一般的発語動詞 *say* である。しかし、伝達動詞が *say* に伴う付加的な意味成分を表す場合は、特別な先行文脈の支えが必要となる。

#### 4. 結 論

本論では、まず、DS と IS に関わる伝達動詞の分類を提示し、DS と IS における伝達動詞の意味的使い分けについて述べた。更に、DS においては、文頭の伝達節には固有の導入機能があり、この種の伝達節は文脈から喚起された情報ないしは推論可能な情報を表すことを指摘した。

#### 注

- 1 Clark & Gerrig (1990:795) では、DS における「逐語的再現」には一定の幅があり、例えば、元発話 i) は ii a) ~ ii c) のいずれの引用形式を取ろうとも、逐語的であるとみなしうとしている。

i) I — I've only been — we've only been to like. four of his l — five of his lectures, right?

ii) a. Sidney says 'I — I've only been — we've only been to like. four of his l — five of his lectures, right?'

b. Sidney says 'We've only been to, like, five of his lectures, right?'

c. Sidney says 'We've only been to five of his lectures.'

上の ii a) は発話の正に完璧な再現であり、ii b) は文の再現であり、更に ii c) はよりフォーマルな言語使用域（例えば新聞記事）における文の再現であるという。

また、Wilson (2000:426) は、類似性に基づく引用発話の表示の例として次のようなものを挙げている。

iii) a. Descartes said, "I think, therefore I am."

b. I looked at John and he's like, "What are you saying?"

- c. And so the kid would say, “Blah blah blah” [tentative voice with rising intonation] and his father would say “Blah blah blah” [in a strong blustery voice], and they would go on like that. (Clark & Gerrig 1990:780)
- 2 以下、データの出典 *Harry Potter and the Philosopher’s Stone* は *Potter* と略記する。
- 3 以下、データの出典 *Alice’s Adventures in Wonderland* は *Alice* と略記する。
- 4 発語内動詞の tell と ask 及び一般的発語動詞 say を伴う伝達節は、次のような強調機能をもつ文末の付加表現と一見紛らわしい。
- i) John’s here, I tell you.
- ii) John’s here, I said.
- iii) What time does the train leave, I ask you. (Davison 1975:172)
- しかしながら、これらの付加表現は、伝達節と違って、主節の伝達内容を引用しているわけではなく、今提示しつつある発話への話者の発話態度を表している。これらは、相手への注意を喚起したり、既に述べたことを想起させたり、更には緊急な質問であることを伝えたりする役割をもつものである。
- 5 内田 (1979:24 (脚注)) は、伝達節の前置・後置には「文脈」が重要な要素の一つであるとし、次の例の伝達節は後置できないとしている。
- i) Wilbur yawned and went back to sleep. *In his dreams* he heard again the voice saying, “I’ll be a friend to you. Go to sleep — you’ll see me in the morning.” (イタリックは原文のまま)
- 内田にはそれ以上の説明はないが、*in his dreams* が先行発話とは異なる新たな場面設定を行い、残りの伝達節が(60)・(61)と同様の変種として導入機能(58)を果たしているとみなせる。上の例では、伝達節を後置すると、導入機能の表示と共に場面設定の提示のタイミングも遅れることになり、「唐突さ」はさらに強まる。

#### 参考文献

- Banfield, A. 1982. *Unspeakable sentences: narration and representation in the language of fiction*. Boston: Routledge.
- Carroll, L. 1865/1975. *Alice’s adventures in Wonderland*. 東京: 北星堂書店。
- Clark, H. and R. Gerrig. 1990. Quotations as demonstrations. *Language* 66:764–805.
- Davison, A. 1975. Indirect speech acts and what to do with them. In Cole, P. and J. L. Morgan (eds.) *Syntax and semantics 3, speech acts*. New York: Academic Press, 143–185.
- Halliday, M. A. K. 1985. *An introduction to functional grammar*. London: Edward Arnold.
- Hornby, A. S. 1948/2000. *Oxford advanced learner’s dictionary*. Oxford: Oxford University Press.
- Huddleston, R. and G. K. Pullum. 2002. *The Cambridge grammar of the English language*. Cambridge: Cambridge University Press.
- 河野 武 1998. 「各種分裂文の関連性特性」, 『大妻女子大学文学部三十周年記念論集』, 289–306.
- Leech, G. N. 1980. *Explorations in semantics and pragmatics*. Amsterdam: John Benjamins B. V.
- Leech, G. N. 1983. *The principles of pragmatics*. London: Longman.
- Lyons, J. 1995. *Linguistic semantics: an introduction*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Prince, E. F. 1978. A comparison of *wh*-clefts and *it*-clefts in discourse. *Language* 54, 883–906.
- Prince, E. F. 1981. Toward a taxonomy of given-new information. In Cole, P. (ed.) *Radical pragmatics*. New York: Academic Press, 223–255.
- Quirk, R., S. Greenbaum, G. Leech, and J. Svartvik. 1985. *A comprehensive grammar of the English language*. London: Longman.
- Rowling, J. K. 1997. *Harry Potter and the philosopher’s stone*. London: Bloomsbury Publishing Plc.
- Sperber, D. and D. Wilson. 1986. *Relevance: communication and cognition*. Oxford: Blackwell.
- Summers, D. (dir.) 1978/1995. *Longman dictionary of contemporary English*. London: Longman.
- 内田聖二 1979. 「直接話法と伝達動詞」, 『語法研究と英語教育』第1号。東京: 山口書店, 22–34.
- Wilson, D. 2000. Metarepresentation and linguistic communication. In Sperber, D. (ed.) *Metarepresentations: a multidisciplinary perspective*. Oxford: Oxford University Press, 411–448.